越高新聞
埼玉県立越ヶ谷高等学校 新聞部 埼玉県越谷市越ヶ谷2788―1
印刷所 埼玉新聞社

明詩社書店

改革の跡をたどって コース制

変革多き道程

越高で生徒大会を開いてから七年が経過した。

この歳月で生徒から出された要求事項（頭髪規定の改訂、コース制の廃止、処分制度の緩和、服装の改善など）は、その後様々な形で現在にいたっている。

この変革の根源となったプロセスを辿り、経緯から現在の越高というものを共に考えていきたいと思う。

ただ、なにぶん、人から聞いた話や当時の記録などをもとにしたので、不確かな点が多々あると思うが、ご容赦いただきたい。

〈1〉

昭和四十四年十一月、生徒大会でコース制の全面廃止が要求の一つとして掲げられた。

当時コース制は、一年から I 進学コース（理数系、文理系）と II 就職コース（文科系）に分けられていた。男女も別々のクラスで併学という形をとっていた訳である。

コース制の全面廃止が叫ばれた主な理由に、コース制によって進学クラスと就職クラスの差別が生じるということであった。

男女共学については、男女がいっしょに生活するのは自然だということであったり、その他、いろいろ理由はあるが、当時の生徒たちは、一部の人たちかもしれないが、古い封建的な考え（男女別クラス等）や、受験体制を打破し、民主的な学校、真の教育をめざしていたようだ。当時の越高新聞にも「真の教育は何処に？」という特集が組まれ、紙面には次のように書いてある。

「多くの生徒たちは高校を中学の延長と思い、あるいは大学への予備校だと思っている。また社会では高校を単に就業訓練所と思っている訳である。しかし、あくまでも人間形成が主眼であり、未知の可能性を引き出す所なのである。だから不合理な試験制度もコース制も、高校にはあってはならないのである」

この要求に対して学校側は、コース制の全面廃止にはならず、新一年は男女共学にする方向と答えた。

翌年四十五年には、一年から分かれていたコース制が二年からになり、新入生は男女共学となった。しかし生徒の要求した全面廃止は認められず、二年三年は依然男女併学であった。

このように学校側がコース制を変えた理由として、「一年生で分けてしまっては早すぎ、コースと進路が合わなくなる場合が多いこと、また就職コースは成績が良くなく、落ちこぼれ的な人が多く集まるので、クラスが荒れてしまうということ、共学にした理由は、その方が自然で男女が助け合う精神は大切だということであった。これには、男女いっしょだと学力の差があって教えにくいという反対意見もあったらしい。

この結果に対して、当時中心メンバーのひとりだった人は、「結局、俺たちの要求は認められず、受験体制の本質はなにも変わっていない」といっていた。一方、ある先生は次のようにいっている。

「確かに本質的な解決にはならなかったが、二年から三年に、併学から共学へと変わったということだけでも大きな意義があったと思う。教育の観点としてはコース制など不必要なものだが、現実問題として進学、受験のことを無視する訳にはいかなかった。」

四十七年 I コースの文理系がミックスになり、四十九年には、就職コースの II コースがなくなった。かわって五十年からは I コースを理数科、II コースを文理系とする。この年から女子の理数科加入もできるようになった。こうして共学から男女併学へという道を歩んできた。もっとも最近は男子が多く男子クラスができることもある。

ところで、現在のコース制に対する反対意見も多く、その反対に生徒の中には、分けてしまった方がいいという点から、二年あるいは入学時から、受験のためや、個性の尊重という点から分けた方がいいという声も少なくない。

今、私たちは以前のようにコース制の全面廃止をという声が少なくなったなかにも、社会的、歴史的背景をよく考えてもらいたい。

自由？ 贅沢？ タクシー通学 魅惑の70円!!

多い生徒のタクシー利用 ―その現実と反響―

日に八台も登校の際に利用されているタクシー。越谷駅から越高まで二八〇円で、4人で相乗りすると、1人当り七〇円というところに魅力があるのだろうが、これでいいのだろうか？

生徒心得では「タクシー利用の件：登校時は身体上の障害又はその他特別な理由がある場合を除いて利用しない」（生徒手帳P51 高校生徒心得 3―⑫）となっている。

タクシーの運転手・父母・生徒の意見などから、また、学生であるという本質において、この事実を考えてみよう。

8時32分 越高校門前

朝八時三十一分、越高の校門にタクシーが二台つづけてやってきた。前車に三年生が二人、後車に三年生が五人の相乗りしてきた。

これが越高生のタクシー利用の現状である。

校規では、利用しないということになっているのに、これは一体どういうことであろうか。

利用者は、三年生が大半をしめ、二年生は三分の一ほど、一年生はくる日とこない日があるようだ。

遅刻に直面しているのは、三～五人で相乗りしてくるのが多いことと、時間が八時三十一～二分に集中していることである。

また、利用者の大部分は男子がしめている。（これらの事実は新聞部の一月の調査によるものである。）

これらの事実に対する生徒の考えはどうであろうか。

新聞部で生徒からアンケートをとり、集計すると次のような答が返ってきた。

◎タクシーを利用した経験

一年 ある52％ ない48％

二年 ある61％ ない39％

三年 ある77％ ない23％

◎利用の主な理由

・遅刻しそうなとき（圧倒的）

・自然条件（雨・風）の厳しい時

・ケガや病気のとき

・友だちのつきあい

・荷物が多い時

◎タクシーの利用について

「別にかまわない。本人の自由」というのが圧倒的であるが、①若いのだから歩け ②金がもったいない ③早く起きれば利用する必要なし ④他人に迷惑等の反対者、①それだけ時間を大切にしている ②電車やバスと同等に考えている ③遅刻しそうな時はよい等の賛成者もいる。

このように、生徒の考えはまちまちである。

大人たちはどう考えているのだろうか。タクシーの運転手、父母のアンケートの答えを見てみよう。

◎校生（越高生）のタクシー利用について、どう思うか。

〈タクシー運転手〉

[illegible]

・不必要・自覚してやめてほしい

・遅刻したくないなら、早く起きればいい

〈父母〉

[illegible] れはいけない

・利用するのは、会社に勤めるような社会人になってから。

・わずかな割合の生徒のために、全生徒が悪く思われてしまう。

・歩いている生徒に迷惑だ。

・健康のためにも歩け。

このように、ほとんどが反対している。

教師側は、生徒心得の通りとしているが、遅刻しそうな場合を認めない等の「特別な場合」の領域、定義というものがはっきりしておらず、先生によって違いがあるようだ。

タクシー利用の越高生は、日に三十人前後であるが、全校生からみれば、ほんのわずかな人数で、利用者はだいたい決まっているのも事実のようだ。

また、三年生は二月から家庭研修にはいったため利用者はかなり減ったようだ。しかし一方、風紀委員会が遅刻対策に補講を実施、取り締りが厳しくなったのでその影響も無視できない。

けがや病気などの時はともかくとして、遅刻しそうだからとか風雨が強いからと理由は、考えものである。

――また、利用者の中には、毎日のように、数人で待ち合わせて乗ってくる常用の人もいるという。家から学校まで歩いていけない距離ではないし、病院へ早くいきたい患者さんなどへの迷惑をも考えれば、やはり、常用の利用などすべきではないだろう。

父母のアンケートの答えにもあったように、少数の生徒のために越高全体が悪く思われることになりかねない。

しかし、実際、利用者の判断に任せるしかない。

タクシーを絶対利用してはならないということもないだろうし、本人の自覚しだいでどうにでもなることだ。

利用者よ、今少しの深い思慮を。

読書感想文コンクール

がんばった！武藤君

誰もが御承知の事と思うが、我が校二年五組の武藤和利君が、県読書感想文コンクールで第一位を獲得した。そして、その作品は全国コンクールへと出品された。中にはその後「どうなったのかな」などと考えていた人もいたのではないだろうか。結果は、残念ながら入賞とまではいかなかったようである。先日武藤君にインタビューしてみたところ

「僕の作品が全国の方へ行ったころですね。忘れた頃「感想は？」など聞かれても、何て言っていいのかわからないよ。全国の方はみごとに落選したらしいが、まあ県で賞をもらったんだから、うれしかったです」

と答えてくれた。数多い作品の中から、優秀作品を決めるのはたいへんなことだ。そんなわけで、武藤君の作品は県で第一位を獲得したのだから、やはりすばらしいことではないだろうか。

ところでみなさんは、夏休みの宿題とされていた読書感想文を提出したであろうか？聞くところによると、いくら催促しても提出しない人も数人いたらしい。考えてみるべきではないか。

私たちは、読書の必要性を知ることが大切だ。コンクールの時だけとは限らず、自ら進んで読書するように心がけなくてはいけないのだ。季節は移り、読書感想文コンクールはまたやってくる。その時には、普段内に潜んでいる力を十分に発揮させ、第二の武藤君、いや彼を追い越す位の作品を作ってみようではないか。

焼石に水?!

生徒会費百円値上げ

昭和五十一年四月から今まで二百円であった生徒会費が、一人あたり百円値上げになる。

これによって今までの入学金と生徒会費の合計三百十三万二千円から四百四十二万八千円と約百二十九万六千円アップする。

しかし、生徒会の予算は依然足らず、要求の三分の二に満たない状態である。

ここで生徒会費値上げ承認の歩みについて説明しよう。

昭和五十年十月、第三十期中央委員会が発案、PTA後援会でPTA会費値上げの話。

昭和五十一年一月、代議員会で承認、PTA会費値上げ決定。

二月、職員会議で生徒会費値上げ承認。

三月、生徒会と会費値上げ承認。五十一年度生徒会予算決定。

五月、PTAからの補助金六十万を生徒会予算に組み込む。

七月、第三十一期中央委員会、代議員会で確認。

昭和五十二年一月、第三十二期中央委員会でPTAに再提出、職員会議で再確認。四月から実施予定。

第32期中央委員 新企画をもって活動開始

左上から近藤・鎌倉・和田・伊藤・沢田・佐藤・石井

昨年の十二月二十三日に「生徒会の日」を使って統一H・Rが行なわれた。これは第三十二期中央委員の行った最初の行事であり、役員は、このH・Rを有効に使おうといろいろ検討したそうだ。その結果、頭髪規定等の要紀に関するものについて話し合うことになった。が、役員選挙にかなりの日時が費やされたため、一週間程度の計画で進めなくてはならず、十分な計画ができなかったどころか、はっきりとした「最終的目的」もつかめなかった。と語ってくれた。

結局「話し合いに参加しよう」「頭髪規定を研究しよう」という主旨のもとで統一H・Rへと突入したのだ。

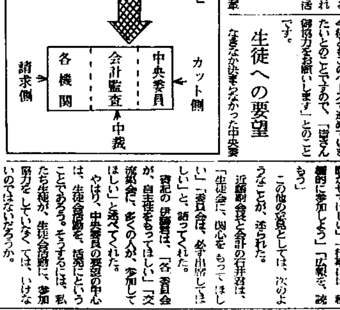
さてクラス討論の様子であるが、クラスによっては「このH・Rの意義はムダではないか」という意見も出され、混乱したようであった。だが、大部分のクラスはうまくはこんでいたらしく、充実した討論をしているクラスも少なくなかった。

結果を見てみると「制服一本化」「完全自由化」「現状維持」の三派に分かれるようである。

この討論を振り返ってはっきり言えることは、徐々に「頭髪規定」への関心が失われていることと、七年前の全校集会当時の「越高を良くしよう」という精神が失われている事だと思われる。この結果は、役員一人一人の心を大いに刺激したらしく、会長の鎌倉君は、この結果を「頭髪規定」の上、あるいは生徒会活動全般に生かせるよう努力したい。と言ってくれた。これからの役員それぞれの活動に期待がもてそうである。

予算会議

鎌倉政権初といわれるこの改革は、彼にとって最大の収穫だったそうです。なんでも、彼が長年抱いていた「夢」だったとのことで、かなり熱を入れたせいか、最初からなかなか好調だったようです。様子は予算会議の合理化とでもいうべきか、毎年長期戦で行なわれていた熱気にあふれた討議を、少しでも楽にし「民主化」させるといった具合です。左図の点線内が新に取り入れられたものです。今後ともこのペースで進めていきたいとのことですので、「皆さん御協力をお願いします」とのことです。



生徒への要望

なかなか決まらなかった中央委員も、決まり早二ケ月たった。そこで、今、全校生徒に対する、中央委員からの、要望などを、生徒会長の鎌倉君を始めとする中央委員の人たちに、インタビューをした。

会長の鎌倉君は、次のようなことを、語ってくれた。「越高を自ら改善しようという精神をもってほしい」「頭髪規定に関心を、もってほしい」「みんなの意見を、聞かせてほしい」「行事には、積極的に参加しよう」「広報を、読もう」

この他の意見としては、次のようなことが、述られた。

近藤副会長と会計の石井君は、「生徒会に、関心を もって ほしい」「委員会は、必ず出席してほしい」と、語ってくれた。

書記の伊藤君は、「各委員会が、自主性をもってほしい」「交流会に、多くの人が、参加してほしい」と述べてくれた。

やはり、中央委員の要望の中心は、生徒会活動を、活発にということであろう。そうするには、私たち生徒が、生徒会活動に、参加協力を していかなくては、いけないのではないだろうか。

越高は狭き門

―高校入試―

今年も三月一日に埼玉県公立高校の入学試験が行われた。

今年は、過去五年間においていちばんの広き門らしい。埼玉県公立全日制の平均競争率を見ると一・二三倍で、昨年の一・二六倍に比べ多少下まわっている。十四日に志願先変更期間が締め切られたが、受験生は四万三千九百六十三人である。実際のところ、願書締め切り日の七日よりも二百二十一人減っている。これらの原因はいったい何だろう。競争率が低くなったのは、今年普通科七校（三十六クラス）既設校九校（十六クラス）が新設されたことにも一理あるのだろう。また、私立校の受験生が増え私立校で滑ろうといったケースも多かったにちがいない。

普通科の競争率は一・二六倍だが、年々職業科を受験する人が増えてきているようである。特に今年目立つのは、職業科の競争率が高いことだ。いくら今年は広き門だといっても、これはいささかきびしいようだ。

また、募集人員に満たない学校が二十七校、十九学科もある。こういう学校では、九割以上は採用するとのことである。

我が越ヶ谷高校では、二、三三倍の競争率となっている。さて今年はどうであろうか。

第一次締め切り日の七日時点を見てみると、県内男子三百八人、女子二百三十九人、計五百四十七人。県外男子九人、女子二人、計十一人で、合計男子三百十七人、女子二百四十一人、計五百五十八人であった。しかし、二月十四日の確定志願者は、県内男子三百五人、女子二百三十一人、計五百三十六人である。昨年度と比較してみると、第一次締め切り日では、男子二百三十八人、女子百四十四人、計三百八十二人で、確定志願者は男子二百十八人、女子百三十八人、計三百五十六人であった。

昨年と比べ今年の特徴としてあげられるものは、一・一〇倍から一・五三倍と高くなったことはもちろんだが、変更期間後の人数にあまり変動がなかったことだ。昨年は第一次締め切り日より二十六人も減っているが、今年は十一人しか減っていない。また、今年は女子の受験生が増えている。これは男子にとってうれしいことで、越高では現在の男女比が二対一であるが、これは志願者の人数上しかたのないことである。さて今年はどうなることであろう。

ところで今年越高への志願者が多いのはなぜだろうか。五十年度卒業生の進学率がよかったことが多少なりとも関係しているようだ。越高では、制服の自由化が認められているので、とかく誤解されがちである。しかし、私服を着てくる人は少なく、標準服着用者が圧倒的に多いのが現状だ。

さて四月には、私たちも新入生を迎え入れることになる。ここでしっかりしなければいけないのだ。そして、新入生をあたたかく迎えてあげようではないか。

厳粛かつ印象的に

第二十九回卒業式

三月一日、卒業式が行われた。今年の卒業生の人数は三百五十四名である。

今年の卒業生の特徴・印象などを三年担当の先生方に聞いてみた。最初に答えてもらったのは教頭先生で、次のようなことを語ってくれた。

「実際的には、昨年の三年生とかわりない。これから実社会に出て生かしてほしい。」

次は吉野先生にうかがった。

「今年の三年生は、比較的素直さがあった。しかし一方では、物足りなさもあった。今年の三年生にもっと歩みよって心の触れ合いがほしかった。今年の三年生は委員会活動を、熱心に活発にやっていた。」

と答えて下さった。

一条先生は、今年の卒業生として「活動は活発だが、勉強の方にいくらか甘さというものがあった。それと自覚がない。できればもっと勉強してほしかった。」

ということだった。

これらの先生方のお話では、今年の三年生は、活動はよくやったが、勉強はしなかったということだった。

次に校長先生に「今年の卒業生に何か一言」とお願いしてみた。

「健康で、規則正しい生き方を、勇気を、持ってやること。これから出発に、どうかしんぼうづよくつづけろ。」

と答えて下さった。

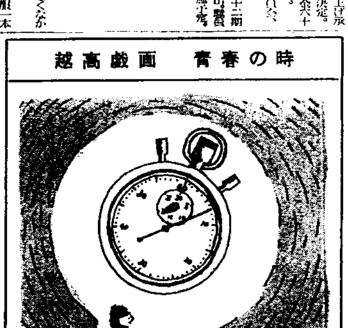
今年の卒業式は、卒業式の係が送辞答辞、リボン作製と放送に分かれている。形式は去年とほとんど同じである。違うのは、体育館での暗幕使用、ライトの使用ということである。

今年の卒業式は、例年に行なうそうである。メインテーマのように「厳粛かつ印象的に」というような卒業式になってほしい。

久伊豆

長野県ほぼ中央に位置する [illegible] 市から西へ善知鳥峠を越え、木曽川の流れと共に下り、岐阜県の東のはずれ中津川市に出る。いわゆる"木曽路"である▼木曽路は、江戸時代に東海道の"うら道"として作られた中山道の四半分を占める。関所が少ない代わりに、福島関所中の難所である。その当時の人々は女の足でも日二〇キロは歩いたと言う。木曽路はどこを歩いても、深い山のざわめきと、川の瀬音に [illegible] る。」（千葉 宮崎「木曽路」）[illegible] り）や「木曽は山の中」とは言われる。それほど山を身近な触として感じさせるものである。木曽と言えば"ひのき"があり、国有林となっている。これは木曽の人々にとって歴史を感じさせるものである。藩時代における伐採禁止令や今の山林制度による山人たちの生活苦があり、今も国有林となっている。とはいえ、山人たちに全て [illegible] れたわけではなく、数多くの [illegible] を残しており、根深いものがある。▼「山や林なしに生きられる地方ではない。」（島崎藤村「夜明け前」）とある。それは自然と人間の結びつきの強いものである。そこには、人間と自然との戦いがあった。また、たちの陰険なる権力への戦いがあった。▼私たちは今、衣食住にほとんどこれといった不自由なく暮らしているが、その反面、無気力感におちいってはいないだろうか。そんな私たちとは逆に、逆境と戦いながら自分をきびしく生きていく人々がいる。▼私たちも何かを自覚して、自から逆境に飛び込むことが必要ではないだろうか。▼木曽路に"水無川"という川がある。（水はちゃんとある。）険しい山を越えて来た旅人たちは、その川を眺めながら故郷に想いを寄せたという。木曽は、もうすぐ [illegible] る。

越高戯画 青春の時



☆☆☆☆☆☆☆☆

たのしい靴 うれしい靴 幸せな靴 ナナホシの靴

ナナホシ靴店

越谷1丁目 ヨーカ堂通り

TEL 0489―63―0307

☆☆☆☆☆☆☆☆☆

にきび、しみは必ず治せる！

西田達弘著 婦人生活社出版

にきびでお悩みの方御一読下さい。

西田式体内浄化美容法指導

私にお電話下さい (62) 2210

アオキ薬局

文具・事務用品

いがらし

校章・襟章・ボタン有ります

TEL (65) 2511

越谷市柳町2―15（越高通り）